

旧淀川周辺にみる大阪の近代化変遷

大阪工業大学大学院 学生員 ○西本 貴洋
 大阪工業大学 正会員 吉川 眞
 大阪工業大学 正会員 田中 一成

1. はじめに

現代の日本は戦後の大規模な復興開発に始まり、高度経済成長期を経て急速に都市域を拡大するなど、量的な充実が図られてきた。そのため、日本の大都市は都市開発にともない特有の地域文化や歴史的景観の多くを失う結果を招いてきた。しかし、大都市の量的な整備が沈静化した近年では、都市環境の充実や活性化を目的として観光政策や歴史教育など都市の歴史に着目した活動が各地で展開されており、歴史に対する関心は高まりつつある。一方、高度情報化社会の真っ只中にある近年は空間情報技術も急速に普及し、GISの利用がより身近になっている。とくに、変遷分析のような長期的な時空間情報の処理を可能とすることから歴史研究において、GISが有効的なツールとして活用されている。

2. 研究の目的と方法

本研究では急速に都市域を拡大してきた明治期以降の大阪を対象としている。大阪は江戸期より水辺を活用し水都として栄えたが、今では関西圏の公共交通機関の結節点が集積し高層ビルが林立する近代都市へと変化してきた。また、江戸や京とともに三都と称されていたにも関わらず、都市変遷に関連する研究は十分に行われていない。そこで、本研究では大阪繁栄の礎であり今も存在する旧淀川を中心として、収集した歴史資料をもとにGISを活用することで明治期以降の都市レベルの変化を明らかにすることを目的としている。そして、変遷のなかで発生・消失した旧淀川周辺の特徴的な都市空間の存在を再認識するとともに、大阪の魅力となる歴史的価値を発見することを目指している。具体的には、まず、過去の地理空間情報が記載されている旧版地形図を用いて地形図データベースを構築する。次に、データベースから空間データを構築後、研究室にて構築された堀川のデータを併せることで、市街地の拡大過程と既成市街地の変化を2次元上で整理・把握する。さらに、大阪の変遷における大きな変化を2次元上で把握した後、代表的な地物モデルを構築・配置した3次元変遷景観シミュレーションを行い、都市レベルでみた歴史的変遷を都市景観のヴィジュアルな表現へ展開することを目指している。

3. 2次元におけるデータ構築

都市変遷の研究ではその長期にわたる変化を効率よく整理することが必要となる。そこで、本研究では市街地の拡大変化がはじまる明治期から終息する昭和後期にかけて約20年ごとに6期の地形図を用いた(表1)。これら旧版地形図をGIS上の現代空間に定位することで地形図データベースを構築している。このデータベースをもとに旧淀川周辺における市街地の拡大過程を表現している。

同時に、長期的な都市開発では市街地が拡大する一方で、既成市街地における建造物の建て替えも繰り返されていることが考えられる。そのため、地形図から判読できる主要建造物を抽出することで土地利用変化の観点に着目した分析・把握を試みている。くわえて、歴史的変遷のなかで変化が生じたと考えられる時期の特定も試みている。さらに、当時のようすがわかる古写真を収集し、現代の写真と比較することによって土地利用変化による影響が各地域で得られる景観に表れているか検証している。これらの結果をもとに、変遷景観シミュレーションに展開するための代表的な建造物の復元を行っている。

キーワード 都市変遷, 旧淀川, 市街化

連絡先 〒535-8585 大阪府大阪市旭区大宮5丁目16番1号 TEL 06-6954-4109 FAX 06-6957-2131

